



第1章 調査に至る経緯

多伎・朝山道路は国土交通省により4車線の高速道路として計画された道路である。この道路は山陰高速道路のうち、出雲市多伎町久村の多伎インターから大田市朝山町朝倉の朝山インターにいたる約9.0kmの区間にあたる。並行する国道9号線には多伎町余草で、JR山陰本線とともに急斜面の海岸断崖中の狭隘な踊り場を通過し、平成18年には当該箇所の崩落により35時間の全面通行止めが発生している。また、大田市仙山峰では十分な線形が確保できず、悪天候時に交通事故が発生すると、代替輸送路がないため、たちまち出雲・石見間の交通が途絶するという交通の難所である。これらの交通渋滞緩和・沿道環境の改善が道路建設の主たる目的である。

この道路建設の計画を受けて、島根県教育委員会文化財課・埋蔵文化財調査センターでは平成16年より、道路建設予定地内での分布調査を実施（H16年度・H18年度）、出雲市側8遺跡、大田市側12遺跡の合計20遺跡を確認した（うち1遺跡は後に対象地外に）。個別遺跡の発掘調査は、平成20年度末の平成21年2月16日～3月11日にかけて、戸井ヶ廻I・戸井ヶ廻II・戸井ヶ廻III遺跡・浅畠遺跡・丸尾城跡の5遺跡について発掘調査を実施した。

翌21年度には2班体制で、川立遺跡・滝ヶ谷遺跡・首沢遺跡・後畠遺跡・青野遺跡・赤谷遺跡・丸尾II遺跡・朝倉古墳・朝倉遺跡・上谷遺跡の10遺跡について発掘調査を実施した（調査期間4月20日～12月16日）。

このうち、出雲市多伎町小田の菅沢遺跡は、縄文時代～近世にかけての遺跡が発見され、6月1日～12月16日にかけて遺跡の所在する斜面水田部（菅沢遺跡A区）と、丘陵頂上部に近い谷部（菅沢遺跡B区）集中的に発掘調査した。

道路建設予定地は前述のような急峻な山地であり、したがって調査対象遺跡は、いずれも丘陵ないし谷部であった。交通路にも恵まれず、発掘調査現場に到着することが困難で、まず作業道を整備することが最初の仕事であった。このようにして調査した遺跡群であったが、人の住みににくい急峻な地形にもかかわらず、遺跡によって差はあるものの各時代の人々の足跡が確実に認められ、今後この地域の歴史を解明する資料となった。

（平石 充）



第1図 菅沢遺跡位置図



第2章 遺跡の歴史的環境

菅沢遺跡は出雲市多伎町小田字菅沢にあり、日本海に注ぐ小田川の下流域左岸の丘陵上にある。河口までは約1kmある。便宜上、小田川に近い調査区をA区、丘陵上の西側にある調査区をB区とした(第5図)。

このあたりの歴史的環境で特筆されるのは、砂原古墳(第2図c13)付近の砂原遺跡である。国道9号付近で玉髓片が採集されたことで、平成21年に同志社大学が発掘調査したところ、旧石器の候補となる玉髓や流紋岩の破片が出土した。それらの上層に堆積した火山灰層は約11~12万年前と推定された。同じ年に島根県埋蔵文化財調査センターも一般県道多伎インター線建設工事に伴って、砂原遺跡と同一丘陵上南東方向約300mにおいて砂原I遺跡を調査した(島根県教委2010)。その結果、玉髓や瑪瑙片を検出したが明らかな加工痕は見られなかった。同時に火山灰を3層確認し、自然科学的分析を行ったところ、下層から約5万年以前の三瓶雲南、約5万年前の三瓶池田、約2.8~3万年前の始良の火山灰に同定された。同志社大学の調査結果とともに今後の検討課題とされる。

縄文時代の遺跡は明確でないが、菅沢地区では尖頭器、石簇、石斧などが採集されており、今回の調査では縄文時代後期の土器が発見されている。少なくとも縄文時代後期には幾つかの集落があった。

海岸沿いで平原部が少なく山地からすぐ海へ続くこのあたりの地勢では弥生時代の遺跡はまれである。菅沢遺跡から最も近い多伎町久村の小沖積平野の矢谷遺跡(第2図c12)で、底部外面に耕跡の残る弥生時代前期の壺が発見されているにすぎない。この土器がほかの地域から運ばれてきたものでない限り、久村でも弥生時代前期に稻作がおこなわれていたことを示す貴重な資料である。また、旧石見国境付近を流れる田儀川流域の多伎藝神社境内のコンクリート製祠の中に付近から出土したと思われる磨製石斧が祀られている。長さ19.6cm、最大幅5.1cm、厚さ3.4cmの流紋岩製で、重量は575gを量る(第4図)。縄文時代晚期~弥生時代前期ごろの石斧と考えられる。

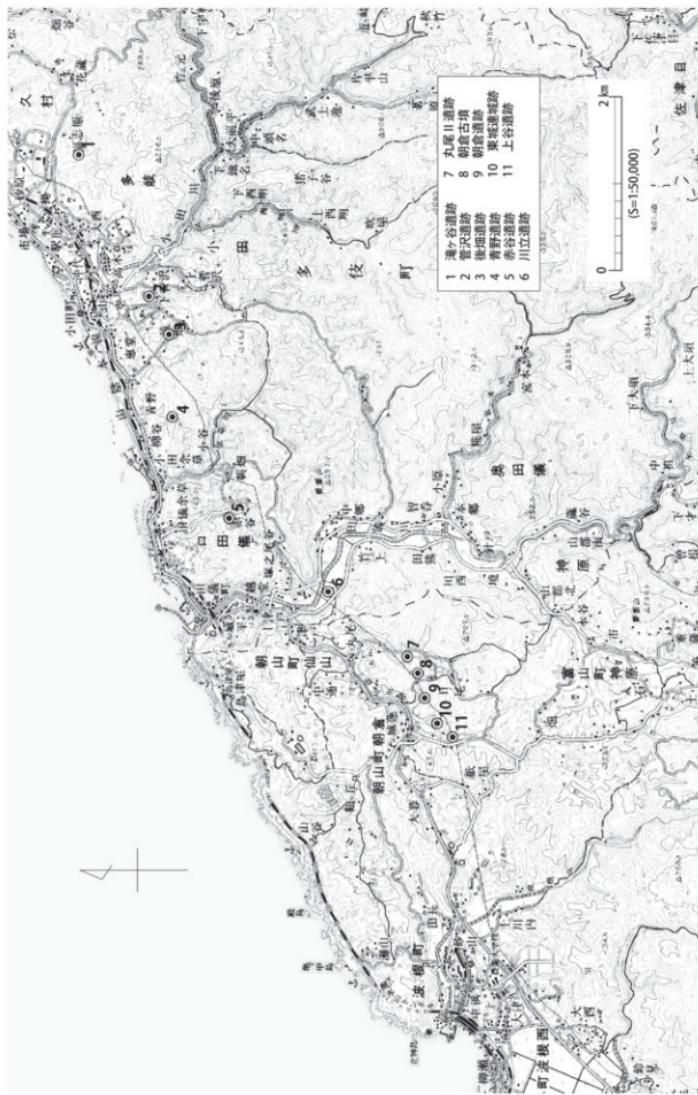
古墳時代に入るといくつかの古墳がみられるようになる。今のところ前期~中期の確実な古墳は確認されていないが、菅原遺跡より西の出雲と石見の境である田儀川流域では中期の小規模古墳である経塚山古墳が知られている。一辺約6m、高さ1mの方墳で、礫床の主体部から滑石製の勾玉・棗玉・管玉など48点が出土している。

後期には横穴墓が造られている。正南横穴群(第2図c14)、砂原小山横穴群(第2図c3)、後谷横穴群(第2図c15)などである。古墳時代後期になり平原部の少ないこの地域にも横穴墓が造られる背景には、稻作や畑作へのみならず、豊富な山野海面資源の開発があったことが考えられる。

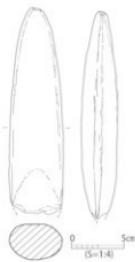
律令期に入ると、このあたりを駿路=古代山陰道がはすことになる。このあたりに住んでいた人々は出雲国の神門郡多伎郷、または多伎郷に編戸された。多伎郷は「郡家の南西二十里なり。所造天下大神の御子、阿陀加夜努志多伎吉比賣命坐しき。故、多吉と云ふ。神龜三年、字を多伎と改む。」との地名起源説話が『出雲國風土記』神門郡条に載せられている。この中の阿陀加夜努志多伎吉比賣命は意宇郡条の不在神祇官の「阿太加夜社」の祭神と考えられており、両地域の関



第2図 菩澤遺跡とその周辺の遺跡



第3図 H21年度多伎・朝山道路遺跡位置図



第4図 多伎芸神社の磨製石斧

係が注目されている（関2012）。

『出雲國風土記』や『延喜式』によれば出雲国には、東より野城驛、黒田驛、千鶴驛、穴道驛、狹結驛、多伎驛の五驛があった。このうち多伎驛は『出雲國風土記』神門郡条に「多伎驛 郡家の西南のかた一十九里なり。」と記されており、神門郡家を出雲市の古志本郷遺跡として里程を測れば、現在の多伎町五反田～久村あたりとなる。また、国防施設の多伎駒は石見国との国境に置かれていた。さらに、『出雲國風土記』や『延喜式』に記載された神社には、多吉社（多伎神社）（第2図2）、多吉社（大穴持命神社）、多吉社、国村社（国村神社）（第2図3）、小田社（第2図5）などがあったので、古墳時代後期から律令期には多くの集落が存在したことがわかる。

中世の山城には平畠城跡、富士ヶ城跡がある。後者は尼子清貞の配下の小田常陸が応永年間（1394～1427）に築城したといわれている。このあたりも戦国時代には尼子氏と大内氏や毛利氏の覇権争いに巻き込まれた。

また、近世の遺跡として、田儀川の支流宮本川流域には国指定史跡である田儀櫻井家たら製鉄遺跡（旧宮本鍛冶屋跡）がある。

【参考・引用文献】

秋本吉郎 1958 「風土記」「日本古典文学大系」2 岩波書店

鳥取県教育委員会 2010 『砂原車廻古墳群・砂原I遺跡』一般県道多伎インター線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

関 和彦 2012 「阿陀加夜努志多伎吉比売」の周辺」「日本古代の地域社会と周縁」吉川弘文館

(内田律雄)